

教科名	対象学年	使用した資料（参考にした資料）	TYPE
国語	中学2年	授業アイデア集【中学校版】p5, 6	Ⅲ

授業内容	随筆の世界観や伝えたいことを発表しよう。
身に付けたい力	・目的や状況に応じて、資料等を効果的に活用して話す力。 ・古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いを想像する力。

教科名	対象学年	学校名	課題の見られた問題	TYPE
国語	2年	熊谷市立荒川中学校	27年度 全国 B1	I
授業の内容	熱く 歴史を語ろう 人間を語ろう。			
身に付けたい力	・目的や状況に応じて、資料等を効果的に活用して話す力。 ・古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いを想像する力。			

単元計画（7時間扱い）

1 平家物語の冒頭部分を音読し合う。
○ 歴史的仮名遣いの確認や、冒頭の内容に含まれている無常観について触れる。

2・3 平家物語「教盛の最期」を音読し、内容を読み取る。
○ 武士の生き様や教盛や直実がどういった心情で言葉が発しているのかを考える。

4・5 グループ（3～4名）で、企画書と使用する資料を作成する。
○ 自分たちの考えの根拠となる情報を選択し、意見は赤で、根拠は青で色分けをして整理する。
(使用する資料)
①教科書 ②資料集 ③自分で調べてきた資料

6 作成した資料を提示しながら、「教盛の人物像」(3グループ)・「当時の武士の考え方」(3グループ)・「直実の人物像」(3グループ)から選択した内容を発表する。

7 自分で調べてきた情報を追加して、聞き手がより納得する資料を作成する。

【「教盛の人物像」グループの発表】
平清盛の甥である、教盛は、笛の名手だった。顔を見ると、美しい顔立ちだった。「容顏まことに美艷なりければ、いづくに刀を立つべしともおぼえず。」という部分からそれが分かる。
また、お歳暮をしたり、直実との会話の仕方（教盛の年長者である直実に対する口調と態度）から、身分も高いことが分かる。
さらに、直実と対峙する際にも海へ逃げようとする逃げられたかもしれないのに、あえて武士として直実と戦う意思を見せた教盛は上流階級といえども、武士としての誇りをもっていたものと考えられる。そのほかにも、味方が来たことにより葛藤している直実の心境まで感じ取る感覚ももち合わせていたと考えられる。

発表の班は、1回目は同じ課題で行い、比較する。その後、もとの班に戻り、発表方法や資料の使い方を再検討する。その後、2回目の発表では、異なる課題で集まり、互いの発表を聞き合う。

1回目の発表

A1 同じ課題の三人 A2
A3

2回目の発表

A1 異なる課題の三人 A2
A3

【「当時の武士の考え方」グループの発表】
当時の考え方として、死ぬことへの美学というのを感じるができる。
「ただ、とくとく首を取れ。」とそのたまひける。と書かれている。早く自分の首を取れというのは、今の時代では考えられない。当時は負け生きながらえることが、生き恥をさらすという考え方だったのではないだろうか。さらに、そういった感情を増幅させるのが、教盛の身分にある。平家の中でもかなり高い身分とわかるところもあり、そういった人がとる行動は、すぐにうわさとして広がり、平家一門としての評判を落とすことになりかねないという考えが、教盛自身の中にあっただのかもしれない。

【「直実の人物像」(語り風) グループの発表】
直実は源平合戦の中でも、当代随一の剛の者として、常に先陣を切って 敵陣に挑んでいる。戦国時代の武将として幾多の敵を打ち取ってきた兵（つわもの）である。しかし、一人の若武者を打ち取ったことを生涯後悔する。それは一ノ谷の戦いで起こった。直実は海辺を逃げる平家の若武者を追い詰めたが息子ほどの若さに驚き、逃がそうとする。しかし、味方が追ってきたため仕方なく打ち取る。後日、打ち取った若武者が17歳ほどの平教盛であると知り、斬りたくない相手も斬らなければならない武士の非情さや世の無常さに苛まれ、後悔の念を抱く。これが、直実がのちに仏門に入る大きな動機となったといわれている。1190年、直実は教盛の7回忌に高野山に熊谷寺を建立し、教盛の供養塔を建てている。

【授業のポイント】
1回目の発表では、同じ課題で集まることで課題解決を深め、発表に自信をもってできることを目的とし、2回目の発表では、異なる課題で発表し合うことで意見の広まりや全体の話を詳しく把握できた。生徒は2回目の発表では、自信をもって話していた。

【授業のポイント①】
○ 「随筆の味わい」の「春はあけぼの（春・夏）」「春はあけぼの（秋・冬）」「うつくしきもの」「仁和寺にある法師」「ある人弓射ることを習ふに」「序段」の中から一つ選び、企画書と使用する資料を作成する。

- 【授業の様子】
- ・話すことが得意な生徒はアナウンサーや司会、絵を描くことが得意な生徒は説明のために必要な図を描くなど、個々の特性に合った役割分担をすることができた。
- 【効果】
- ・古典文学に苦手意識を持っていた生徒が、意欲的に作品に向き合っていた。
- 【留意点】
- ・資料を効果的に使う力を養うために、教科書や便覧、辞典などを活用するよう促しておく。

【授業のポイント②】

○1回目の発表では随筆の現代語訳や内容の紹介をし、班を再編成した後、1回目の発表に使用した資料などを生かしながら、作品に込められた思いや背景を伝えられるような発表をする。

【授業の様子】

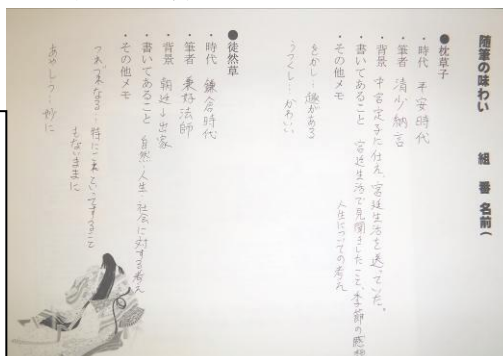
- ・1回目の発表を経て自信をつけた生徒が、あえて違う役割に立候補したり、1回目で自分が担当した役割の内容やコツなどを2回目の班で教えていたりする姿が見られた。1回目よりも自信を持って発表することができ、質疑応答にもはっきり答えていた。

【効果】

- ・自身が調べ、作成した資料を違う視点から生かすことで、情報の効果的な示し方を学ぶことができた。また、その作品に丁寧に関わることで理解が深まり、古典文学自体に興味を持つ生徒もいた。

【留意点】

- ・古典独特の物の見方や考え方に触れさせるために、時代背景や当時の常識などを共通認識させておく。



【授業のポイント③】

○他の班の発表を聞きながら、あらかじめ配られたワークシートに情報を書き込んでいく。必ず書き込まなければいけない欄と、自分が興味を持った、おもしろいと感じた

ことを書き込む欄に分け、自分だけのノートを作っていく。必ず書き込まなければならない欄は発表後班ごとに確認し合い、聞き逃したことがないように共通認識をさせておく。

【授業の様子】

- ・様々な方法で発表される情報を、真剣な眼差しで見て、聞き取っていた。聞き逃したことや疑問に思ったことは、発表の最後に積極的に質問し、積極的に取り組むことができていた。

【効果】

- ・自分が聞き取り、書き込んだ情報がそのまま自分の糧となるため、情報を得ることが楽しいと感じられているようだった。また、最後に班ごとに押さえるべき内容の確認があるため、全体の知識が偏らずに終わることができた。

【留意点】

- ・書き取る作業が極端に苦手な生徒もいるため教師が配慮し、メモをとる活動を補助したり、不安を抱える生徒用に違うワークシートを準備したりしておくが良い。